伊藤整集

49

現代文学大系

伊藤整集

現代文学大系　49

現代文学大系49　伊藤整集

昭和四十年四月十日発行

著　者　伊藤整

発行者　古田晁

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

装　幀　真鍋博

本文用紙　三菱製紙株式会社
表紙クロス　東洋クロス株式会社
本文整版　株式会社精興社
本文印刷　株式会社精興社
製本　株式会社鈴木製本所

東京久我山の自宅書斎にて　昭和三十八年五月

伊藤　整集　目次

鳴海仙吉　五
火の鳥　二四三
馬喰の果て　三七七
逃亡奴隷と仮面紳士　三九六
本質移転論　四〇一
我が秩序の認識　四一三
近代日本人の発想の諸形式　四二一
組織と人間　四五四
年譜　四六二
人と文学　瀬沼茂樹　四七〇

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

口絵写真撮影　杉村　恒

伊藤整集

むしばめる花

伊藤整

子供の泣き声が耳に入って目が覚めた。眠りが足りない と思うと、おなかすくってのことが感はしい。もう眠れさうもないので、起き出して鏡の前に坐ってみた。顔の皮膚は乾れてゐて、クリームで拭いても汚れが残ってゐる。朝のうち風呂へ入るといいのだが、今の妻との生活では、彩りは吉れ出せない。

鳴海仙吉

読者に

鳴海仙吉とは誰か。作者自身にちがいないとあなたは思うでしょう。

とんでもないことです。鳴海仙吉は君です、あなたです。

一つ気の利いたことを言ってやろうと思う時、君は鳴海仙吉です。

この急場を何とか切り抜けようと思う時、君は鳴海仙吉です。

心の傷に眼をつぶって生きのびようと思う時、君は鳴海仙吉です。

鳴海仙吉は自殺もせず、革命もしませんでした。将来もしないでしょう。彼は飴色縁の眼鏡をかけ、鼠色のダブルの洋服を着、革鞄を持って、智慧あり顔に街を歩いています。君のように、また作者のように。

一　鳴海仙吉の朝

今日は鳴海仙吉の札幌へ出かける日である。彼は朝日の射す、自分の小さな家の縁側の古椅子に腰かけて、大事そうに一本の巻煙草を喫っている。彼は外出用の、三四年前に裏がえしたフラノの服のズボンをつけ、ワイシャツを着てカラアをつけずにいる。彼はその姿のまま、この縁側のすぐ向うにある、この家と鍵の手に並んで建っている母家で朝食を済まして来たところだ。母は早くから起きて畑へ行ったらしく、見えなかった。

彼はこの三間の、隠居家に一人で暮している。食事は母家の弟夫婦や母と一緒にしている。仙吉は妻と子供二人を連れて、去年の春東京からここへ疎開して来た。その夏、戦争が終り、冬を越すと、妻の桃子は、中学二年生の梅太郎と一年生の竹二郎とを連れて、幸いに空襲の火災から免れて残った東京の郊外の借家へ戻って行った。都会生活に慣れた身体の弱い桃子は、働きものの姑の監督を受けて、ここできりきり働かされるのに閉口していた。それに都会育ちの妻や子供たちは東京への郷愁に憑かれていた。仙吉は、妻子を東京に送り届けてからこの家に戻り、週に二日札幌の学校へ講義に行き、外の日は売文の評論や随筆を書いて暮している。

彼はさっきから新聞を待っているのだが、それはまだ来

ない。そのとき、彼の足もとの縁さきに弟の子供が三人現われた。七つと五つの坊主頭、それに、もっと小さい三つのおかっぱである。

「伯父ちゃん、寝坊だなあ」と七つの務が、自分の言っていることが分っているという表情を、陽に焼けた面長な顔に浮べ、仙吉の顔を批評するように眺めながら言った。

「伯父ちゃん、寝坊なんだよ」と五つの丸顔の久が、賑やかな、騒ぎ立てたい気質から、仙吉の坐っている椅子の脚を動かそうとして握って見ながら、兄の言葉を繰りかえした。

「うん」と言いながら、仙吉は煙草の灰を、久の丸い大きな頭にかからないように、気をつけて落した。

「オジチャン、ワワ」と、やっとこの頃戸外を歩けるようになった三つの恵が、まわらぬ口で兄たちを真似、目だけは一人前に利口そうに光らした。彼女はやっと首が縁側から出る程であった。

三人とも伯父さんに相手になってもらいたいのである。だが、仙吉は昨夜おそくまでかかって手を入れた十五年も昔の自分の詩のことを考えていたので、この爆発物のような子供たちに応じてやらなかった。

「伯父ちゃん」と力を入れて繰りかえしたのは、二番目の丸顔のはしゃぎ屋の久であった。いつもあんなに仲よくしたじゃないか、という非難の調子があった。

「うん」と答えるだけで、仙吉は子供等の方を見なかった。食後の煙草を静かに吸いながら、彼はあれ等の古い詩を直して見たら、そこから今後また自分の詩を作るきっかけを産み出せるものかどうかを思案していたのである。

背の順に並んだ子供たちは、伯父さんが何か言ってくれるかと、暫く待っていたが、それが無駄だと分ると、つまらなそうに、それぞれモンペ型ズボンの後姿を見せながら裏庭の方へ歩いて行った。それにしても昨夜手を入れた詩はどんな風だったか、考えすぎて調子をこわしていないか、昔のものは昔のまま直さない方がよかったかしら、と思って仙吉は腰をあげ、玄関の上りかまちを横切って三畳の書斎へ入って行った。

そこはフロオリングを張った板敷である。西向きの格子窓の下の、古風な型の坐り机の上に、縁の黄色くなった古ノオトが拡げてある。その前に敷いてある黒い座蒲団に坐って、鳴海仙吉はもう一度昨夜手を入れた詩に眼を通した。

林で書いた詩

やっぱりこの事は言わずに行こう。
今のままのあなたを
淋しければ目に浮べていよう。
あなたは白樺の緑の美しい故郷で嫁に行き、
いいお母様になり、
日々の生活のなかに

夢みたいな私のことは
刺のように心から抜いて棄てるだろう。
私の言葉などは
若さの言わせた間違いに過ぎないときめてしまうだろう。
いつか、人が皆忘れた頃に私は故郷へ帰り、
閑古鳥のよく聞える
から松の林の端れに家を建てて住もう。
草藪に蔽われて見えなくなるような家を。
私は李の垣根に沿って村道を歩き、
数々の思い出を拾い集め、
それを古風な更紗のようにつぎ合せて
一つの物語にしよう。
すべてが遅すぎるその時になったら、
私はきれぎれな色あせた物語を書き、
枝を洩れて月影の射す机の上に置こう。

この詩はあちこちを書き直してあった。一行目は「この事だけは」となっていたのを、何年とも知れぬ前に「だけ」を消してある。五行目の「いいお母様になり」というのは、全部二本の棒を引いて消してあったのを、昨夜彼はまた生かして見たのである。それを入れた方が、一人の青年が、その愛情をうち明けるのをためらう愛人の未来の姿として描くのに適当かどうか分らなかった。この詩にある自己放棄のロマンチックな夢にとって、この一行は不消化な夾雑物になりそうでもあり、またその女性の姿を完全にするのに役立ちそうでもあった。仙吉はそう思って、また生かして見たのだが、自信はなかった。最後の二行は、

枝を洩れて月影の射す机上に
私はきれぎれな色あせた物語を書き残そう。

となっていたのを、ふと昨夜このように直して見たのだった。物語を書いてから、机の上に置く、という方が、もっと静かな落ちついた印象になりそうであった。しかし、いま朝の明るい光のなかで読みかえすと、二十歳の青年の書いた畳みかけるような反復の調子がそこで挫けているような気もするのであった。

仙吉は左手で額をおさえて机に肘を突いた。確信を持てなかった。確信を持てない。だが、二十二三の時におれがこの詩の中で夢想していたこの故郷へ帰って暮すという生活に、とうとうおれは立ち到ったわけだな、と彼は思うのであった。仙吉は、それに続いて、茂木ユリ子のことを考えた。仙吉は二十二三歳の頃、友人の茂木篤の妹だったユリ子のことを考えながら、この詩を書いたのであった。そして、それから十五年あまり経った仙吉が空襲下の東京から村へ逃げ戻ると、ユリ子も戦争で夫を失い、女の子を一人連れた未亡人として村に戻って来ていた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

むかし彼は茂木篤の家で、ユリ子やその姉のマリ子と遊んだ。歌留多をとったり、トランプをしたりした。ユリ子は、いつも自分の内側に引っ込んでいるような、ひどく内気な娘であった。トランプに負けても勝っても、少し微笑し、蒼白い頬にちょっと赤味がさすだけであった。人形をつくったり裁縫をしたりしていて、家に引っ籠っていた。姉のマリ子は性格が派手で、出好きで、おしゃれであった。マリ子は十八でユリ子は十六であった。仙吉はマリ子と恋愛遊戯めいた交渉を持つようになった。マリ子と映画を見に行ったり、海水浴に行ったり、林檎園のすみで接吻したりした。仙吉はじりじりして、それを本気にしようとするのだが、マリ子は無邪気さとコケットリイとの混った賑やかさで、いつも仙吉をはぐらかしていた。家の中に引っ込んでいる蒼白い無口なユリ子は、彼に無縁な世界の少女のように思われた。

茂木家へ行くと、がらんとした大きな家にユリ子と女中しかいなくって、ユリ子が出て来ることがあった。

「兄さんは、今朝早く出かけましたの。」

「どこですか？　学校のテニスコオトかな？」

すると、ユリ子はだまって下駄をつっかけて、長い土間のつき当りの物置へ行く。どうしたのかと思っていると、だまって戻って来て、仙吉の前に立ち止り、ちょっと微笑してから、ゆっくりと低い声で言うのだった。

「あのう、ラケットはおいてあります。釣竿が見えないようですから、釣に行ったのでしょうか。」

ユリ子は小柄で、丸顔だった。笑うときも、微笑はゆっくりとその頬に現われ、ゆっくりと消えるのだった。唇から顎にかけての丸味が、無邪気な何か幼な児のような印象を与えた。

それだけの会話で、仙吉は大分長いことユリ子と話をし合ったような気がするのであった。マリ子と半日海岸の砂の上に裸で寝ころがったり、水のかけっこをしたりして遊ぶよりも、まだ子供にすぎないユリ子とかわすこういう二言三言の方が、女性の真近に居るような気のすることがあった。ユリ子のその真面目な、軟かな調子に、仙吉は、妙に軽い圧迫を覚えるのであった。それで

「あ、釣か。じゃまた」と帽子に手をかけて引きかえすのだが、ユリ子はなかば後向きになった彼に向って、少し首をかしげて、ていねいに膝まで手が届くような挨拶をするのであった。その挨拶が終ってユリ子が頭を上げるまで待たずに、いつも仙吉は茂木家を出てしまったような気がした。

大学の最後の年の暑中休暇に村へ戻ったとき、マリ子が仙吉を林檎園へ誘った。二人は夕方出かけた。マリ子は近いうち札幌へお嫁に行くことになった、と彼にうちあけた。そして仙吉を泣かせ、自分も泣いた。そのとき仙吉は自分がマリ子を本当に愛していたような気がした。だがマリ子は嫁に行ってしまった。高等工業を卒業した茂木篤は仙台

の土木建築会社に勤めていたが、マリ子の婚礼のことで来ていた。ある日仙吉は彼に逢いに行き、ユリ子に逢った。すると仙吉は、この無口な少女にマリ子への自分の感情が移入されたような気がした。そして真面目な気持になったとき、心がひとりでにユリ子のぼんやりと白い顔に集中していたのであった。しかし彼はマリ子と恋愛をしていたのだし、その前にもマリ子の友達の正子という少女と向見ずな恋愛をしていた。そういうことをユリ子は知っている。それでユリ子を子供だと思いながら、仙吉はいつも気後れを感じていた。だが今度上京したらもう村へ戻れないだろうとその頃彼は考えていたので、何ごともなくユリ子と別れてしまうのが、淋しかった。その淋しさから彼はこの詩を書き、書いてしまうと、本当に自分の愛していた少女はユリ子だったのだと思って、ひどく感傷的になった。マリ子との軽はずみな恋愛で、本当に優しいこの少女の愛を失った人間として自分を考えた。ユリ子そのものより、この淡い悲しみの甘さを彼は忘れることができなかった。その後何年か東京にいるうちに、仙吉は、ユリ子が結婚して横浜へ行っているということを聞いた。その頃は彼も東京で桃子と結婚していたが、仙吉はマリ子のことよりもよくユリ子のことをどういう男の妻になったのかなと思い出すのだった。

いまユリ子はすぐ仙吉の近所の農業会に勤めて、そこの倉庫の端を仕切って住んでいて、朝夕に顔を合せるのだ。蒼白かった彼女は、もっと健康そうな、陽にやけた赤らんだ顔になったため、昔の夢想的な感じはないが、線のはっきりした若々しい容貌を保っていた。その小柄な丸顔の唇から顎にかけて、幼女らしい特徴のある昔の表情が笑うと現われた。彼女は三十過ぎとは思えないほど物ごとに叮嚀で、おどおどして、一人前の主婦になり切っていない若妻のように、戦後のけわしい世間を怖ろしげに見ているのだった。配給物を取りそこなったりしては、

「私はまあ、何て馬鹿なんでしょう」と仙吉の母に言い、言っているうちに涙ぐむのだった。髪をきちんと結っているかと思うと、簡単服の上着の袖が綻びている。時には鼻のわきに煤をつけている。足袋に穴があいている。村の主婦たちは哀れみと軽蔑の目で、以前金持の娘だったユリ子の生活力の無さを見ているのだった。畑も作っていないから野菜物に困って、よく仙吉の母がくれてやっていた。亡くなったユリ子の夫は、会社員だということであったが、シナで終戦の半年程前に戦死したのであった。ユリ子は藤田というその亡夫の姓を名乗っていた。

自分の詩の対象になるような女などは、今は生きにくい世の中なのだなあ、と鳴海仙吉はユリ子の生活を見ていて思うのであった。彼は自分の詩の中にいるユリ子は、今のユリ子とは別な人間であったような気がするのだ。今ではユリ子は戦死者の妻であり、母親であり、生活に自信のない主婦であり、仙吉や母に厄介をかける隣人であった。そ

れ等の条件が昔の彼女の姿を蔽い埋めて、この詩の情感をはかない夢のようなものとしか思わせなくなっている。仙吉はユリ子のために、扶助料のことや、保険金のことや、食料のことなどで相談を受け、世話を焼いてやる。だが彼女のことを歌った詩をこうして長い間しまっていて、夜遅くまで筆を加えたりしていることは口に出さない。

鳴海仙吉は、文芸評論家として、英文学や仏文学の飜訳家としてこの十五年あまり東京で生活して来たが、はじめは詩人になるつもりだった。仙吉は中学生の頃から詩を作り、詩人以外のものにはなるまいと思っていた。大学の文科に籍があった頃、彼は学校へはろくに出席せず、若い詩人たちと交際していた。彼は自分の詩を整理して二冊のノオトブックに清書し、一冊には「雪の道」他の一冊には「李咲く村」という題をつけた。彼はその「雪の道」を二百部ほど自費で印刷して出版した。郷里から送られて来た授業料で印刷費を払ったのだった。その詩集は、その頃出ていた詩の雑誌で二三の賞讃的な批評を受けた。ある先輩の詩人が、仙吉は新しい詩壇の希望であるという手紙を呉れたりした。彼はそれで、もう詩人として一人前になった気持で、頼まれるままに四篇か五篇の詩を残ったノオトの中から写して雑誌に発表し、大学の授業料は払わなかった。そして一年ほど経って見ると、彼は、詩の稿料では生活できず、学校を除名になっている自分を見出したのだった。

腹を立てた父は、絶縁同様にして送金してくれなくなった。彼は飜訳をし、文芸批評を書き、新しい詩論を主張する原稿など書いて原稿料を稼ぎはじめた。すると詩の泉が涸れてしまったように、彼は一篇の詩も書けなくなった。彼の評論や研究が批評で悪口を言われるのは、彼は比較的平気だった。こんなものは売文だ、何とでも言うがいい。彼は原稿で生活する為には、外国の新しい文芸思潮を紹介しなければならなかった。彼は十九世紀から二十世紀にかけてのサンボリスムの詩論を否定し、ヴェルレエヌやイェーツやメエテルリンクなどの詩は過去のものだと言った。そしてその頃第一次世界戦争後の欧洲のヒステリックな若い詩人の唱え出したダダイスムや、超現実主義の詩論を紹介した。ジャン・コクトオやガアトルウド・スタインやエズラ・パウンドやブレエズ・サンドラルスなどの実験的な詩の、飜訳できないような言葉の綾を、ことさら飜訳したりして、先輩の詩人を苛立たせ、伝統的な日本の文芸思潮に挑戦した。そういうことをしなければ、先輩のひしめき合っている文壇へ、彼のようなものが割り込む権利は無い、と彼は思ったのであった。そうすると彼は方々からの非難攻撃の的になったが非難されればされるほど彼は新しい詩の理論の代表者と目されるようになった。

しかし彼自身は二十歳前後に耽読したイェーツやヴェルレエヌの詩の影響を受けていて、自分の理論では否定した過去のスタイルでしか詩を書いていなかった。それで彼は、一層自分の昔の詩を発表することができない羽目に自分を

追い込んだのだった。彼はしかも自分の評論をひそかに、売文だ、身すぎ世すぎだと思っていたのだった。フランスやイギリスの第一次世界戦後の絶望的な若い詩人たちの韻律の摸索や言葉の実験を彼は信用していなかった。そして絶えず内心では冥想的なイェーツを美しいと思い、傷ついた小鳥の歌のようなヴェルレエヌを、そしてもっと古いラマルチイヌを信仰し、上田敏と島崎藤村と北原白秋を愛読した。そして、それ等の影響を受けたと思っている自分の詩にひそかに確信を抱いていた。

鳴海仙吉の評論集や訳詩集や随筆集などが次々と本になって行った。彼はそれによって文学者としてどうにか生活できるようになった。しかし彼がその評論において否定し排斥した古風な精神とスタイルで書かれた彼自身の詩、そして自らその価値を信じている詩は世に出る機会を失ってしまった。そのことを彼は、世間を見くびった自分のやり方の当然の酬いだ、と一種の自嘲でもって承認した。しかし一方では、見ろ、出たらめな評論が大手を振って歩き、真実の美しい詩が埋もれてしまう、とそれだけ一層世間を見くびった。仙吉は時々その古い詩のノオトと今では一冊しか残っていない仮綴の貧相な詩集「雪の道」を本箱の奥から取り出して読み、ひそかにそれ等の詩に確信を持った。そしてちょっと筆を加えてはまたしまい込むのをひそかな楽しみにしていた。

仙吉が三十歳になった頃、日本は満洲で戦争を始め、それがシナ全土にひろがって行った。それに続いて欧洲でヒットラアがポオランドやノルウエイやフランスに侵入した。日本はそれに呼応して太平洋でイギリスとアメリカを相手に戦争を始めた。欧米の色彩を帯びた思想は日本では悉く異端とされるようになった。英仏の文学を種本にしていた鳴海仙吉は仕事がしにくくなった。鳴海仙吉は英米派で自由主義者だ、と言って槍玉にあげられることが何度かあったが、彼は知らぬふりをして過ごした。彼は抒情詩人的な臆病さから、マルクシズムに自分を登録したことが無かったので、投獄と中世の宗教裁判のような転向宣誓の強要は免れた。だが仙吉は立場の不安を感じて国粋主義者の知人に個人的に接近し、詩人の任務は国家の隆興に寄与するところにあるという趣旨の愛国詩人論を書いたりした。そして彼は英米派として罵られるのを怖れ、召集を怖れ、空襲を怖れ、戦々兢々として数年を過ごした。

その太平洋戦争が終って見ると、彼は父親の残した五町歩の畑の地主として郷里の母の隠居家に住んでおり、超現実主義も愛国詩人論も雲散霧消したような安心を覚え、あの古い一冊の詩集と詩のノオトとを、それ等を昔書いた青年時代の自分の机の上に拡げて夜遅くまで坐っているのであった。彼は四十歳になっていた。

机の上のインキ壜のそばにおいてある腕時計が八時を指していた。彼は八時四十分の汽車に乗らねばならないのだ。仙吉は五分の一ほど残った巻煙草を崩さないように灰皿の

縁で消し、それを煙草の箱の中へ叮嚀にしまい込んだ。煙草の配給は少いし、闇値で買うと公定価格の十倍ほど金を払わなければならなかった。巻煙草の喫いがらは、あとで日本伝統の細い煙管にはめると無駄なく喫えるのだった。仙吉はノオトブックを閉じ、引出しにしまって立ち上った。窓の横の釘にかけてあるソフトカラアと太糸ホオムスパンの褐色のネクタイとを取って、柱がけの錆びた鏡の前でそれをつけた。

彼は去年の秋眼鏡をこわした時、それまで使っていたような黒いセルロイド縁が札幌の眼鏡屋に無くて、しゃれた形の飴色縁のを作らせたが、それが少し気障っぽいような気がして、ネクタイを結ぶ度に自分の顔を見直すのであった。今もその鏡の中に仙吉は、平べったく、色艶の悪い、眼の窪んだ、癖の強い髪が寝起きのまま逆立っている自分の顔を見るのであった。飴色の眼鏡は、少し派手で自分の顔に似合わないような気がした。

どうもこいつは、と思いながら仙吉はチョッキとダブルの上着とを着、その胸のポケットから小形の櫛を取り出して髪を撫でつけた。そして、もう一度鏡をのぞいた。昔その同じ鏡に写っていた鳴海仙吉とどこが違うのだろう。昔はもっと気障な縁なし眼鏡をかけていても、何となく似合っていたものだった。頬はもっと艶があって赤かったし、眼も窪んでいなかったが、おれは同じ鳴海仙吉ではないのか。母親が懸命に畑を作っていてくれるので、自分は戦後の日本人の大部分がかかっている栄養失調にもなっていない。魚だって漁業会に勤めている弟の仕事の関係で、毎日のように食べている。東京にいた頃こけていた頬は大分直って来た。

それなのに一体この顔はなんだろう。仙吉はその暗赤色の眼鏡の似合わない自分の顔を今度は他人のような気持でじろじろと眺めた。

その鏡に写っているのは、もう人生に驚きを期待しなくなった、一種の精神疲労感を持った、もの分りのよさそうな、洋服をきちんと着た、少し神経質な中年の紳士の顔であった。その顔は、何か仙吉の気持にそぐわなかった。なぜだろう、と考えて、彼はたった今まで読んでいた自分の昔の詩を思い浮べた。そうだ、おれはもうあんな夢を抱いていた二十歳の青年ではないのだ。それなのに、俺は今あの詩を書いた頃の自分を鏡の中に見るような気持でいたのだった。おれは、四十歳の紳士で、二人の中学生の父親で、知名の文芸評論家で、そして札幌農業大学の講師で、それから五町歩の畑を持っている地主だ。なるほど、そういう人間の顔なのだ、これは。

そう思うと、鳴海仙吉はすっかり考え直さなければならぬような気持になった。変ったのは茂木ユリ子だけではない、おれが変ったのだ。おれはまるで別な人間になっているのだ。

仙吉は学校で講義に使うノオトや参考書と折り畳み椅子

の入っている手さげ鞄に、今朝弟の嫁がつくってくれた新聞紙包みの弁当箱を入れた。欄間の釘にかかっている中折帽子をかぶり、玄関へ下りて靴を穿いた。そのあいだ彼は考えていたので、動作はのろのろしていた。おれはまたこの村へ落ちついたのを機会に、昔のように詩を書こうと思っている。この故郷の自然の中で、時々評論を東京の雑誌に発表しながら、ソオロオのように、フランシス・ジャムのように自然詩人としての生活を送ろうと、漠然と考えている。だが、どうもその考えは、この敗戦後の日本ではどことなく時代錯誤で、不自然で、身勝手のような感じがする。おれは桃子や子供たちを東京にやってしまってからは、気楽な身分になったように思っていた。責任のない二十歳頃と同じような独身生活を、昔おれが詩を書いたこの村で送れることになったと思った。哀れなユリ子が身近にいることも何となく気に入っていた。何か昔から予定されていた運命が自分を待っていたような気もした。「林の中で書いた詩」がおれの運命を予言していたとさえ思った。この小さい家で、おれは詩人として目立たない静かな生活を、いよいよすることになれる、と。しかし、どうも……

鳴海仙吉は硝子戸を閉め、弟の家の台所の暗い硝子窓に向って、ちょっとうなずいた。こちらからは見えないが、そこから仙吉の出かける所を見ているかも知れない弟の嫁の広子に、あとを頼みます、という意を伝えるためであった。道路まで五六間ある道の右側の溝にそって、葡萄の枝を一尺ほどに切ったのが、何百本となく同じ傾斜を保ってその湿地に差し込んである。それは仙吉の弟の良吉が葡萄の苗を育てているのである。

仙吉は道路に沿った小川の向う側に立っている五六十坪の農業会の建物の左の端の窓をちらと見た。そこの赤い土管の煙突から、うすく煙が出ていた。そこがユリ子の住居であった。何か煮物でもしているのだろう。そこから川の両側に立っている家並を五六軒通り過ぎ、軒下の金網を張った鶏小屋のある家の所から左に折れ、大きな寺の横の李の垣根に沿って駅へ行く坂道を登って行った。李の花はもう終ったので、李はとげとげしい乱雑な枝に貧相な葉をつけた藪としか見えなくなっている。北海道は今がまだ春の季節なのだ。道の両側の溝には、雪解時の地下水らしいきれいな水が勢いよく流れている。蕗や蓬や芹などがそういう溝の縁や畑の畦や崖の上などに伸びて来る季節だが、今年は村の者や町から来る者が残らず取ったので、食用にならない雑草のみが、はびこっている。虎杖の硬くなった幹や馬だいしと言われる葉の大きな草などである。寺の裏の林檎畑が白く花をつけていた。道路の右側の斜面にあるその林檎畑では何十本かの林檎の木が一面に日光を受けて咲きほこっている。そこは、仙吉がマリ子としばしば逢った林檎園で、もとは茂木家のものだった。畑の奥の方に、その頃茂木家の別宅だった小さな家がまだあるが、今では畑も家も人手に渡っている。マリ子と別れるときに、二人で

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com